

工芸概論 2

## 「琳派と工芸」

工芸概論 2



俵屋宗達 作：国宝「風神雷神屏風図」（1624年）

桃山時代に始まり江戸時代末期まで250余年続く「琳派」の象徴ともいえる絵図  
(京都建仁寺 蔵)

工芸概論 2

**琳派とは**  
江戸時代初め17世紀頃、京都の本阿弥光悦と俵屋宗達が、平安時代の和絵技法や題材を取り入れ、上質な和趣味の絵画や工芸品を展開したのが始まり。当時の格式張った江戸文化とは対極の、革新的でユーモアがあり、豊かな装飾を備えた最新流行のモードだった。その百年後には、同じく京都の尾形光琳・乾山兄弟がこの様式を発展させ、その100年後の19世紀には江戸の酒井抱一や京琳派の絵師たちに受け継がれていった。300年にも渡って琳派が伝えられてきたのは、日本文化が本来持つユーモアや洗練された美意識のエッセンスが詰まっているからである。

|                 |         |        |               |
|-----------------|---------|--------|---------------|
| 本阿弥 光悦<br>俵屋 宗達 | 尾形 光琳   | 酒井 抱一  | 浅井 忠<br>神坂 雪佳 |
| 江戸時代前半          | 江戸時代隆盛期 |        | 明治時代          |
| 17世紀前半          | 18世紀前半  | 19世紀前半 | 20世紀初頭        |

尾形光琳 → 琳派

工芸概論 2

## 琳派の登場

(徳川幕府草創期の京都)

17世紀前半

**工芸概論 2**

**本阿弥 光悦**  
 京都生まれ。工芸家、書家、画家、出版者、作庭師、能面打ち、様々な顔を持つマルチ・アーティスト。  
 優れたデザイン・センスを持ち、すべてのジャンルに名品を残した。



**「舟橋蒔絵硯箱」**  
 蓋甲を高く盛り上げた独特の姿をみせる硯箱。箱の外側を金地に仕立て、鉛板の橋を斜めに渡す大胆な装飾材料の用法を特色とする。

**「白楽茶碗 銘 不二山」国宝**  
 わびさびた景色が気品と威風を漂わせる。窯内の偶然で片身変りし、雪を戴いた富士山のような景色に変容。天下に二つと無き神意を感じて、「不二山」の銘を付けた。

**工芸概論 2**

**依屋宗達**  
 江戸時代前期に活躍した京都を代表する絵師のひとり。その生涯の詳細においては不明な点が多い。京都の名家出身で、陶芸や蒔絵、書などに才能を発揮する。



**「唐獅子杉戸絵」**  
 (京都 養源院)

**工芸概論 2**



**依屋宗達**  
 白象図：杉戸絵 (京都 養源院)

**依屋宗達**  
 犬図  
 たらしこみ (墨を濃淡で描き出す技法)

**工芸概論 2**



**依屋宗達 作：国宝「風神雷神屏風図」 (1624年)**

桃山時代に始まり江戸時代末期まで250余年続く「琳派」の象徴ともいえる絵図 (京都建仁寺 蔵)



工芸概論 2

**琳派の確立**  
(18世紀前半)


工芸概論 2

**尾形光琳**  
江戸時代中期を代表する画家のひとり。主に京都の富裕な町衆を顧客とし、王朝時代の古典を学びつつ、明快で装飾的な作品を残した。



**尾形光琳「紅白梅図屏風」**  
白梅と紅梅は左右に対照の妙をみせ、中央に水流をおいて末広がりの微妙な曲面をつくり上げた構図で画面に重厚なリズム感と洒落た装飾性を与えている。

工芸概論 2



**尾形光琳「八橋図屏風」**  
総金地の六曲一双屏風に、鮮烈に描きだされた燕子花（カキツバタ）の群生。リズムカルに配置された燕子花や橋が稲妻のように配される点など、幾何学的な要素や異なる質感の導入によって屏風絵の構図に新機軸を見いだそうとしている。

工芸概論 2



**尾形光琳「住之江蒔絵硯（すずり）箱」**  
大胆に切った鉛板を嵌め込んだ岩や、金蒔絵による波間の所々に、銀板で形どったダイナミックな意匠。  
手本は本阿弥光悦作「舟橋蒔絵硯箱」であろうと考えられている。

**尾形光琳「八橋蒔絵螺鈿硯箱」**  
表面には黒漆を塗り、蓋表に燕子花（カキツバタ）と板橋を描く。燕子花には厚手のアワビ貝を打ち欠いて用い、葉と茎は金の蒔絵で表現する。光琳の繊細な感性と緻密な計算によって表現された大胆な造形である。

**工芸概論 2**

**尾形 乾山 (けんざん)**  
江戸中期の陶芸家。尾形光琳の弟。鳴滝に窯を開き、光琳の絵付けによる合作をつくる。光琳が派手好みであったのに対し、乾山は内向的な性格の持主であったといわれている。



**「錆 (さび) 絵染付金彩繪替土器 (かわらけ) 皿」**  
鉄分の多い土で、轆轤(ろくろ)を使わずに手で成型した懷石用の皿。四季折々の自然を切り取って描かれ、金彩が施されている。



**「色絵紅葉図透彫反鉢」**  
黄色、赤、緑の発色がすばらしく、反った口縁の内と外に隙間なく描かれた紅葉の意匠とシャープな形が見事に調和している。

**工芸概論 2**

**琳派の継承  
(19世紀前半)**

**工芸概論 2**

**酒井抱一 (ほういつ)**  
江戸時代後期を代表する「江戸琳派」の創始的絵師。伝統的な大和絵を祖とする優雅で装飾性豊かな琳派的表現と、江戸文化独特の叙情性や粋を凝らした瀟洒な美意識、文学趣味などを融合させた独自の様式を確立。



**「秋草鶉 (うすら) 図」**  
端正でリズムカルに伸びるススキと、精緻なタッチも冴える鶉の群れ。月の黒は、ススキの穂を浮かび上がらすために、あえて墨を用いた。



**「四季草花蒔絵茶箱」**  
酒井抱一 (下絵) と蒔絵師・原羊遊齋のコラボ作品。箱全体に四季折々の草花が描かれている。

**工芸概論 2**

**酒井抱一「桜に小禽図」**  
たっぷりと余白をとり、鳥 (オオルリ) をワンポイントに。枝や葉をたらし込みを駆使して描き、空間も描写も力の入れどころ抜きどころが自在。



**中村芳中 (ほうちゅう)「白梅小禽図屏風」**  
ゆったりと描かれた梅の幹は大胆なたらし込み。簡略化し意匠化された花、鳥の赤いくちばしのアクセントが特徴。





工芸概論 2

**琳派の再評価**  
(20世紀初頭)

工芸概論 2

19世紀後半から20世紀にかけて、ヨーロッパでの万国博覧会に出品された「工芸品」が高評価を得る。

木村表齋  
「鶯宿梅（おうしゆくばい）蒔絵吸物椀」




初代 稲葉七穂 「七宝装飾飾り棚」




工芸概論 2

**ジャポニズム**  
19世紀中頃の万国博覧会への出品をきっかけに、日本の浮世絵、琳派、工芸品などが注目され、欧州の作家たちに大きな影響を与えた。

リトグラフのポスター  
オートレックの構図




『名所江戸百景 大はしあたけの夕立』 歌川広重



ゴッホ『タンギー爺さん』後ろに浮世絵が描かれている

工芸概論 2

**浅井 忠**  
明治時代に活躍した洋画家。東京美術学校（現・東京芸術大学）の教授となり、パリに留学。アールヌーヴォーやジャポニズムを通して琳派を評価。帰国後京都へ移り住み、京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）の教授に就任。京都の美術家や工芸家に影響を与える。

尾形光琳たちの硯箱の造形に影響されている。

浅井忠 図案  
杉林古香 作  
鶏梅蒔絵文庫



浅井忠  
蒔絵図案（鶏合せ）



杉林古香作 鶏合蒔絵硯箱




工芸概論 2



浅井忠の「けしの花（陶器図案）」  
アールヌーボーの影響が見られる。

浅井忠のパリの下宿  
ミュシャのポスターも飾られていた。

浅井忠 図案  
杉林古香 作  
朝顔時絵手箱  
(これも光琳の影響)

工芸概論 2



浅井忠 「けしの花（陶器図案）」  
アールヌーボーの影響が見られる。

浅井忠 「梅図花生」 琳派の影響が見られる。

工芸概論 2

四代 清水六兵衛 「花瓶」  
アールヌーボーの影響が見られる。



工芸概論 2

「アール・ヌーヴォー」  
19世紀末にヨーロッパで花開いた新しい装飾美術の傾向のこと。  
有機的な自由曲線の組み合わせ、鉄やガラスといった素材が特徴。

アール・ヌーヴォーは  
フランス語で「新しい芸術」の意味。



エクトール・ギマール  
カステル・ペランジェの門扉（左）  
メトロ入口のガラス屋根（上）



**工芸概論 2**

**神坂雪佳**  
 京都生まれの日本画家。工芸图案や装飾芸術に関心をもった雪佳は琳派を研究。欧州を歴訪してアルヌーヴォーの形式を取り入れるなどした作風は欧米で熱い賛美を浴びる。京都市立美術工芸学校（現京都市立芸術大学）で教鞭をとり、わが国の近代工芸の発展に大きく貢献。



**神坂雪佳 『八橋』 - 木版画**  
 尾形光琳が描いた八橋が、雪佳の感性でモダンにアレンジされている。このデザインはフランスのエルメス発行のカタログ誌「ル・モンド・エルメス」の表紙にも採用され、雪佳の人気を高めた作品でもある。

**工芸概論 2**

**神坂雪佳の木版画**

**「狗児（えのこ）」**  
 仔犬がカタツムリを眺める姿がユーモラスでかわいらしい。



**「白鷺」**  
 手前に大胆に描かれているのは籠。わざと筆致を変えることで、遠くにいる白鷺にピントを合わせている。



**「雪中竹」**  
 雪の竹林で出会った、一匹の雀。出会った瞬間、思わず目を合わせてしまった。



**工芸概論 2**

**芸艸堂（うんそうどう）**  
 カラー印刷技術が発明される以前、書物のカラー図版は石版画や銅版、そして多色摺の木版で創られていた。日本では、特に浮世絵版画の流れをくむ職人たちによる木版技術が進歩し、明治から昭和初期にかけて、多色摺木版の美しい書物が数多く刊行された。「芸艸堂」は明治24年に創業した日本で唯一の手摺木版本の出版社。

木版画の世界へようこそ



創業明治24年  
**芸艸堂** unsodo  
 UNSODO

京都市中京区寺町二条南入

**工芸概論 2**



**神坂雪佳 图案「菊花透し影鉢」**




**神坂雪佳 图案「菊图水指」**

五代 清水六兵衛作  
 「水の図向付皿」

神坂雪佳  
 「水の図向付皿图案」  
 光琳風波模様が特徴

工芸概論 2

「浅井忠」も「神坂雪佳」も自らの作品づくりに加え、作家に図案を提供する「工芸プロデューサー」の側面も持っていたことは「琳派300年」の流れの終焉として、近代工芸界への新たな方向性を示唆することになった。

工芸概論 2

**細見美術館**  
大阪の実業家、細見家三代の蒐集をもとに、京都の文化ゾーン岡崎に開館。琳派や伊藤若冲など江戸時代の絵画に優品が多く、いずれの分野でも内外屈指のコレクションとして知られている。




京都市左京区岡崎最勝寺町

工芸概論 2



**琳派400年記念祭**

本阿弥光悦が、芸術村（光悦村）をつくるにあたり京都鷹峯の地を江戸幕府から与えられた1615年から400年にあたる2015年に開かれる。



工芸概論 2



琳派の美意識。未来へ  
**琳派400年記念祭**  
プレフォーラムin京都

主催：京都市、京都市・京西回廊現代芸術振興委員会  
後援：古典の行儀委員会  
日時：平成25年10月6日(日) 13:00~17:00  
会場：慶応大学アバンセ・ホール  
参加費：無料



プログラム  
ごあいさつ  
京都府知事 山崎三郎  
京都市長 門田大作  
第1部：展開演説  
会場情報  
第2部：パネルディスカッション  
司会者 河本信彦  
コーディネーター 佐々木美幸  
コーディネーター 高橋尚子  
コーディネーター 山本悠子  
第3部：交流会